

社会的状況が孤独感および対人認知に及ぼす影響

廣岡 秀一¹⁾・徳谷 智美²⁾

The effects of social situation on loneliness and person perception

Shuichi HIROOKA and Satomi TOKUTANI

本研究は、改訂版 UCLA 孤独感尺度を用いて孤独感を2時点にわたって測定し、慢性的孤独者と状況的孤独者とに被験者を分類し、対人認知傾向と親和動機との関係を検討した。大学生 238 名に対する2度にわたる縦断的調査の結果、状況的孤独感には親和動機と関連しているが、慢性的孤独感にはあまり影響していない可能性が示唆された。また、パーソナリティ認知の3次元ごとに対人認知傾向を検討した結果、特に活動性次元において孤独感の性質によるパーソナリティ認知に違いが見られた。ここから、孤独者の対人認知傾向を考える際には、孤独感の性質を考慮する必要があることが示唆された。また、今後の課題として、孤独感を喚起する状況について、直接的な検討が必要であると考えられた。

Key words: social situation, loneliness, the UCLA Loneliness Scale, person perception

【問題と目的】

日常生活の中で、ふと孤独を感じるということは、おそらく誰もが経験しているだろう。孤独感というのは、日常的に広く認知される情動の1つである。

孤独を感じることで、つまり、孤独感についての心理学的定義はいくつかあるが、Peplau & Perlman (1982) は「孤独感とは、①関係の現実レベルが願望レベルよりも低下したとき、また②関係の願望レベルが現実レベルよりも上昇したときに引き起こされる」という認知的くいちがいモデルを提唱し、対人的な孤独感を定義している。

ところで、これまで対人的孤独感に関する研究には、高孤独者あるいはそれを取り巻く他者の認知について検討してきたものがある。「認知的くいちがいモデル」を考えると、他者および自己に関する認知が孤独感に大きく影響していることは明白であり、孤独感研究における対人認知研究は

重要な位置を占めていると言える。

Jones, Freeman, & Goswick (1981) は、高孤独者は他者に対してネガティブな評価や印象を抱く傾向があることを示した。また、会話などの相互作用を用いて、他者からの評価を検討した研究もいくつかあるが、これらの中には、高孤独者が何らかの側面で低く(ネガティブに)評価されるとするものがある(諸井, 1995)。

ところで、これらの研究では、UCLA 孤独感尺度などで得点が高かった者を「孤独感が喚起された者」として単純に低得点者群と比較していることが多く、またその多くが一時的な印象形成や対人認知を扱ったものでもある。しかしながら、孤独感には主に状況に規定される一時的な事態特性成分と、状況の影響を被りにくい慢性的な個体特性成分とを想定することができる(Cutrona, 1982; 諸井, 1986)。つまり孤独感を状況的孤独感と慢性的孤独感(Rook, 1988)に区別するこ

1) 三重大学教育学部 e-mail: shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 e-mail: toku_cu@hkg.odn.ne.jp

とが可能であれば、このような性質の違いが高孤独者の対人認知、あるいは他者からの認知に違った影響を及ぼしている可能性も十分に考えられる。

慢性的孤独感は「孤独の感じやすさ」などといった個人特性によって喚起され、長期間持続し、慢性化しやすい孤独感である。つまり、日常生活の中で誰もが経験するような孤独状態ではない。一方、状況的孤独感というのは、たとえば学校に入学・転校する、あるいは会社に入社するといった社会生活環境の急激な変化、すなわち生活事態変化によって、誰にでも容易に引き起こされるものである。したがって、孤独の感じやすさといった個人特性とは別に、状況が喚起する孤独感もつ影響力へのアプローチが必要となってくる。

こういった生活事態変化、すなわち状況の変化によって引き起こされる一時的な孤独感、時間の経過につれ次第に低減傾向が見られることが、大学新入生を対象としたいくつかの研究で確認されている (Cutrona, 1982; 諸井, 1986, 1991; 廣岡・星野, 2000)。つまりこれは、孤独感を喚起していた社会的状況が変化したため、孤独感が解消されたのだと捉えることが可能である。

林 (1978) は、対人認知の基本3次元として「社会的望ましさ」「個人的親しみやすさ」「活動性」を想定したが、それぞれの次元に対するウェイトが社会的状況によって異なってくるのが廣岡 (1990) によって認められている。とすれば、状況的孤独感が喚起されている人 (以下、状況的孤独感群) の対人認知様式 (例えば認知的複雑性など) は慢性的孤独感が高い人 (以下、慢性的孤独感群) のそれとは異なったものである可能性が考えられる。また、Fiske & Taylor (1991) の言うように、人間を「認知の儉約家」と見た場合、その場にあるちょっとした手がかりが過度に知覚されたり、無視されたりといったように、孤独感を喚起する状況的な要因が対人的判断に大きな影響をもたらすことも大いに考えられる (廣岡, 1996)。

さらに、Byrne & Nelson (1965) による「類似-魅力仮説」を参考にすれば、孤独者の他者に対する魅力を、状況的・慢性的に孤独を感じている程度の類似度の観点から検討することも意味を持つてくると考えられる。つまり、状況的孤独感が喚起されている者ならば、同じように状況的孤独感が喚起されている他者をポジティブに認知する傾向がある可能性を指摘することが可能である。

本研究では、認知パターンのひとつの指標として、認知的複雑性を用いる。認知的複雑性とは、「社会的環境を多次的に認知できる能力 (Bieri et al., 1966)」と定義され、このような能力の高い人は、いろいろな可能性を含んだ事象に対して、極端で、限定的な認知をすることが少なく、事象を ambivalent な観点からも認知することができると考えられている (林, 1976)。したがって、認知的複雑性の能力が高い者ほど、他者を様々な視点から見ることができると考えられる。そのために、他者との関係における願望レベルと現実レベルのくいちがいが大きくなる可能性が高くなるとも考えられる。また逆に他者を単純に見る場合には、願望レベルと現実レベルのくいちがいが小さくなるということも考えられ、慢性的孤独感群の方が認知が複雑になっており、また時期の経過と共に孤独感が高くなっている者や通常状態の孤独感が高い者の認知も複雑になっていることが予測される。

ところで、状況的孤独感については、相川 (1996) を参考に、本研究では以下のように操作的に定義する。すなわち、孤独感の測定は5月と7月の2時点において実施し、2回とも孤独感が高い得点を示した被調査者を「慢性的孤独者」とし、5月には孤独が高まっているものの7月には低下している被調査者を「状況的孤独者」とした。

以上、本研究を目的を要約すれば、以下のようになる。第1に、状況的孤独感と慢性的孤独感を2度にわたる孤独感の測定から操作的に定義し、架空の孤独な人物 (孤独 SP) への認知傾向の差異を検討することを主たる目的とする。具体的には、主に認知的複雑性と SP のパーソナリティ評定という視点から分析を行う。なお本研究では、従来孤独感と関係が深いとされてきた親和動機との関係についても検討する。

【仮説】

1. 慢性的孤独感群の他者認知は状況的孤独感群よりも複雑になっているだろう。
2. 状況的孤独感群は状況的孤独 SP、慢性的孤独感群は慢性的孤独 SP へのパーソナリティ評価が高いだろう。

【方法】

調査対象

2001年5月中旬と7月中旬の2度にわたって三重県の国立大学生計238名（男子93名、女子145名）を対象に質問紙調査を行った。

質問紙

タイトルは「大学生の対人認知に関する調査」とした。フェースシートでは学部、学科、学年、性別、年齢、居住環境を尋ねた。また2回の測定において被験者を同定するために、自宅や下宿の電話番号下4桁の記入を依頼した。

質問紙では孤独感、親和動機の測定および架空の孤独者（3人）に対する評価を求めた。架空の孤独者としては「孤独感（慢性的孤独感、状況的孤独感、非孤独）」×「性（男・女）」の刺激人物6人の特徴を文章で構成し、「性」のバランスを考えながら、個々の被験者には3種の孤独者の3人を文章によって呈示した。慢性的孤独者についてはBorys & Perlman（1985）が使用した文をもとに作成し、状況的孤独者、非孤独者については新たに作成した。

①SPの記述

慢性的孤独SP（Borys & Perlman, 1985より）：「A男は18歳、大学一年生だ。彼はとても物静かで、時間があるときには、自分のことを考えて過ごしている。彼は次のように感じているのだ。自分は大学で周りから疎外されており、コンパなどのイベントにも参加させてもらえない。頼ったり依存したりできるような人は自分には誰もいないのだと。彼に親しい友人はいない。友人の作り方を知らないで、社会的接触を避けがちなのだ。彼は人の輪の中に入ると、自分を部外者のように感じてしまい、いつも楽しい時間を過ごせないでいる。そのため、自分の学科の勉強に集中することで、自分を孤立させてしまっている。A男はこう考えている。自分は劣っていて、拒絶されている。自分は間違っているのだと。そして他人は自分ようではないのだと。ときどき彼はいらだち、全てのことが最低だと思えてくるのだった。」女性の場合には、A子という名前を用いた。

状況的孤独SP：「S子は18歳。大学1年生である。高校時代の彼女はいつも友達に囲まれていて、毎日楽しく過ごしていた。明るくよく笑う子であった。しかし最近では少し気が滅入りがちであ

る。というのも、入学式から1ヶ月間、交通事故で入院していたためである。ゴールデンウィークが明けて初めて大学に行くと、教室ではなんとなく友達の輪が出来上がっていた。自分の前の席に座った子達は、コンパの話で盛り上がっていて、とても楽しそうに見える。A子は居心地悪げに周りを見渡すと、同じようなグループがちらほらしている。教室全体が、がやがやと盛り上がっていて、ぼつんと座っている自分がとても惨めに思えてくるのだった。」男性の場合には、S男という名前を用いた。

ニュートラルな他者（非孤独SP）：「N男は18歳。大学1年生である。彼女はとくにこれといって目立つ性格でもなく、かといって暗いと思われたこともない。大学に入学し、見知らぬ土地にひとりだけでやって来たが、友達もできて、楽しく過ごしている。大学生活にも慣れてきたので、何かを始めようといろんなクラブをのぞいている最中である。」女性の場合には、N子という名前を用いた。

②尺度

改訂版UCLA孤独感尺度：Russell, Peplau, & Cutrona（1980）により作成され、工藤・西川（1983）により邦訳された逆転項目を含む前20項目からなる尺度。今回の調査では被験者に4件法で実施した。（1：しばしば感じる～4：決して感じない）

親和動機尺度：Hill（1987）の対人志向性尺度を、岡島（1988）が日本語版として作成した26項目からなる尺度。今回はこのうち13項目を選択し、7段階で評定させる。（1：非常に当てはまる～7：全く当てはまらない）

パーソナリティ評定尺度：廣岡（1990）の「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」の各因子に高い負荷量を示す項目で構成される尺度。今回はこれに若干の修正を加えた21項目を7段階で実施した。

③質問紙の実施の手続き：第2回目の調査を実施した後に、被験者に本研究の目的と仮説を簡単に説明し、調査を終了した。

【結果と考察】

1. 各尺度の因子分析結果

①改訂UCLA孤独感尺度について

逆転項目を含む改訂UCLA孤独感尺度20項目

について、主因子法による因子分析を行った。これまでの分析結果から判断して因子数は1因子とした (Table 1)。これより、第1因子と相関が低かった項目8 (私の興味や考えは、私の周囲の人たちとは違う) および項目10 (私は外出好きの人間である) を除いて、全18項目の α 係数を算出したところ、0.90という高い数値を得た。したがって内的整合性は十分に高いと判断し、この尺度構成得点を孤独感得点としてその後の分析に用いた (1~4点)。なお、得点は高くなるほど孤独感が高いことを示している。

②親和動機尺度について

逆転項目を含む親和動機尺度13項目について、主因子法による因子分析を行い、3因子を抽出し、その結果をバリマックス回転した項目7と項目11を除いて、従来の研究と同様の因子構造が見られた (Table 2)。

第1因子は「注目」、第2因子は「ポジティブ刺激」、第3因子は「情緒的支持」と解釈が可能であった。また、項目7と11を除いた場合、各因子の α 係数はそれぞれ、0.72、0.64、0.69であった。因子分析の結果では、項目7は第1因子に負荷していたが、これを含めて第1因子の α 係数を算出した場合、内的整合性が低くなってしま

うため、この項目を除外した。得点は高くなるほど親和動機が高いことを示す。

③パーソナリティ評定尺度について

パーソナリティ評定尺度21項目について、主因子法による因子分析を行い、上位3因子をバリマックス回転した。その結果、従来の研究と同様の因子構造が見られた。第1因子から順に「活動性」、「社会的望ましさ」、「個人的親しみやすさ」と解釈が可能であった (Table 3)。各因子の α 係数はそれぞれ0.95、0.77、0.84であった。

2. 状況的孤独感群と慢性的孤独感群の検討

①当該被験者の抽出および親和動機との関連について

相川 (1996) は、状況的孤独感と慢性的孤独感を区別する方法の1つに、孤独感尺度を2度実施し、1時点のみで孤独感が高い場合を状況的孤独感、2時点とも高い場合を慢性的孤独感とする方法があると述べている。この考え方を参考にしながら本研究では5月と7月の孤独感得点の高さに注目し、各時期の全体平均を基準に、5月 (High群: Low群) ×7月 (High群: Low群) の2×2の4群を設定した。各群はそれぞれH-H (High-High) 群、H-L (High-Low) 群、L-H群、

Table 1 改訂 UCLA 孤独感尺度 因子分析結果 (全データ)

項目	因子1
*1 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている	<u>-0.590</u>
2 私は人とのつきあいがいい	<u>0.626</u>
3 私には頼りにできる人がだれもない	<u>0.674</u>
*4 私はひとりぼっちではない	<u>-0.465</u>
*5 私は親しい友達の気心がわかる	<u>-0.417</u>
*6 私は自分の周囲の人たちと共通点が多い	<u>-0.436</u>
7 私は今、誰とも親しくしていない	<u>0.626</u>
8 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとは違う	0.331
*9 私には親近感の持てる人たちがいる	<u>-0.678</u>
*10 私は外出好きの人間である	-0.357
11 私は疎外されている	<u>0.582</u>
12 私の社会的なつながりはうわべだけのものである	<u>0.611</u>
13 私をよく知っている人はだれもない	<u>0.668</u>
14 私は他の人たちから孤立している	<u>0.709</u>
*15 私はその気になれば、人とつきあうことができる	<u>-0.323</u>
*16 私をほんとうに理解している人たちがいる	<u>-0.614</u>
17 私は大変引っ込み思案なのでみじめである	<u>0.413</u>
18 私には知人はいるが、気心の知れた人はいない	<u>0.724</u>
*19 私には話しあえる人たちがいる	<u>-0.714</u>
*20 私には頼れる人たちがいる	<u>-0.699</u>
寄与率 (%)	33.5

*印は逆転項目をさす。

社会的状況が孤独感および対人認知に及ぼす影響

Table 2 親和動機尺度 因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
1. 色々な人と関わることで、その人たちについて知ることは重要だ	0.211	0.412	0.015	0.215
2. 自分に共感してくれる人のそばにいたい	0.706	0.095	0.046	0.510
3. 何が起きているかわからないとき、自分と同じ経験をしている人と一緒にいたい	0.606	0.111	0.161	0.405
4. 初対面の人に対しても、好かれるように努力する	0.216	0.383	0.603	0.557
5. 物事がうまくいかないときにいつでも親しく信頼できる友人と一緒にいたい	0.525	0.257	0.046	0.343
6. 人付き合いの機会には喜んで参加する	0.015	0.678	0.029	0.461
*7. 自分をあまり肯定してくれない人とは一緒にいたくない	0.515	-0.194	0.282	0.382
8. 自分が何をしてよいか分からない場面に遭遇したときは、誰かにそばにいてほしい	0.566	0.251	0.197	0.423
9. 自分に好意を持ってくれる人とだけ一緒にいたい	0.436	-0.160	0.317	0.316
10. できるだけ数多くの人と友人になりたい	0.076	0.620	0.076	0.397
11. 自分に好意を持ってくれる人から何かを頼まれるとうれしい	0.315	0.346	0.097	0.229
12. 人から嫌われないようになるべく意見を合わせようとする	0.217	0.152	0.664	0.512
13. 自分の周囲の人たちが、みんな好意的に思える	-0.039	0.433	0.172	0.219
寄与率 (%)	16.6	13.1	8.5	

* 印は逆転項目をさす。

Table 3 パーソナリティ評定尺度 因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
1. ふまじめな - まじめな	-0.437	0.513	0.133	0.47
2. 人のわるい - 人のよい	0.260	0.316	0.594	0.52
3. 沈んだ - うきうきした	0.798	0.046	0.076	0.65
4. にくらしい - かわいらしい	0.447	0.216	0.502	0.50
5. 近づきたい - 人なっごい	0.824	-0.013	0.362	0.81
6. 思いやりのない - 思いやりのある	0.172	0.344	0.641	0.56
7. 消極的な - 積極的な	0.908	0.057	0.101	0.84
8. 責任感のない - 責任感のある	0.220	0.587	0.291	0.48
9. たよりない - しっかりした	0.579	0.489	0.152	0.60
*10. 外向的な - 内向的な	-0.874	0.106	-0.135	0.79
11. だらしない - きちんとした	0.041	0.656	0.133	0.45
12. じみな - 派手な	0.761	-0.104	0.234	0.65
13. 不親切な - 親切な	0.179	0.441	0.548	0.53
14. 頭のわるい - 頭のよい	-0.024	0.561	0.120	0.33
15. 意志が弱い - 意志が強い	0.526	0.432	-0.029	0.46
16. 親しみにくい - 親しみやすい	0.847	0.022	0.320	0.82
17. つめたい - あたたかい	0.484	0.322	0.515	0.60
18. 軽率な - 慎重な	-0.265	0.571	0.122	0.41
19. 軽薄な - 重厚な	-0.039	0.549	0.216	0.35
20. 非社交的な - 社交的な	0.911	-0.055	0.210	0.88
21. 無口な - おしゃべりな	0.874	-0.074	0.261	0.84
寄与率 (%)	34.69	14.31	10.65	

* 印は逆転項目をさす。

L-L群と命名した。なお、この群分けによると、慢性的孤独感群と考えられるのはH-H群にあたり、状況的孤独感群はH-L群、およびL-H群にあたると思われる。

Table 4には、各群の孤独感得点の平均が示されている。

Table 4 各群の孤独感得点

	N	5月	7月
		M (SD)	M (SD)
H-H群	91	2.39 (.32)	2.35 (.32)
H-L群	20	2.08 (.11)	1.75 (.19)
L-H群	24	1.71 (.14)	2.11 (.25)
L-L群	94	1.52 (.23)	1.55 (.24)

この孤独感の分類を基に、親和動機得点について、時期(5月:7月)×孤独群(H-H:H-L:L-H:L-L)の2要因分散分析を行った。その結果、群の主効果が認められた(F(3, 222) = 4.34, p < .01)。そこでTukey法による多重比較を行った結果、H-H群とL-L群の間に有意差が認められた(p < .01)。ここから、親和動機については、H-H群よりもL-L群の方が、つまり一貫して低孤独であるものが最も高く、一貫して高孤独者は低いことがわかる。また、その交互作用は有意とはなっていないが、Fig. 1からは、孤独感を低減していった状況的孤独者(H-L群)の親和動機は比較的高く、さらに孤独感を解消した7月の方がより高くなっていることが読みとれる。一方、孤独感を高めた状況的孤独者(L-H群)の親和動機はかなり低く、時点間の変化も少ない(Fig. 1)。

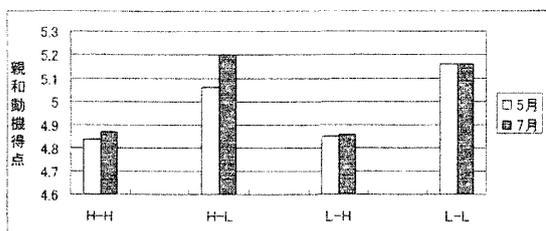


Fig. 1 4群別における親和動機得点

②孤独 SP に対する認知的複雑性について

孤独 SP に対する認知的複雑性得点は、林(1976)のTCCを用いて算出した。算出方法は以下の通りである。

まず、7段階で評定した結果を、評価的にポジティブに考えられるものを+、中点を0、評価的

にネガティブに考えられるものを-、として分類し、符号化する。次に各人物ごとで、符号化された21個の性格特性形容詞有為のそれぞれの一致を調べる。そして+または-での一致に1点、0での一致に0.5点を付け、その一致得点を次の式により計算した。

$$CC_i = {}_k C_2 \times 1 + {}_l C_2 \times 1 + {}_m C_2 \times 0.5$$

k: +に評定された項目数

l: -に評定された項目数

m: 中점에評定された項目数

$$TCC = \sum CC_i$$

孤独 SP に対する TCC 得点について、時期(5月:7月)×孤独群(H-H:H-L:L-H:L-L)の2要因分散分析を行った。その結果、時期の主効果が認められた(F(1, 225) = 4.67, p < .05)。これより、孤独 SP に対して、全体的に7月の方が複雑に認知していることが示された(Fig. 2)。また、2つの要因の交互作用は有意ではなかった。ただし、H-L群およびL-H群における認知的複雑性得点の時点間変化は、H-H群およびL-L群における時点間変化よりも大きいことがFig. 2から読みとることができる。

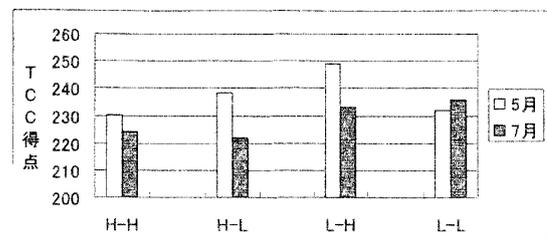


Fig. 2 4群別による TCC 得点

③孤独 SP へのパーソナリティ認知に関する検討

また、各孤独 SP について、パーソナリティ評定の3次元(活動性:社会的望ましさ:個人的親しみやすさ)ごとに、時期(5月:7月)×群(H-H:H-L:L-H:L-L)の2要因分散分析を行った。その結果、慢性的孤独 SP の活動性次元において、時期の主効果(F(1, 224) = 15.99, p < .001)、および群の主効果(F(3, 224) = 5.24, p < .01)が認められた。群についてTukey法による多重比較を行ったところ、H-H群とL-L群の間に有意差が認められた(p < .01)。またL-H群とL-L群の間にも差が認められた(p < .05)。これより、L-L群が他の群に比較して、慢性的



Fig. 3 慢性的孤独 SP に対する
パーソナリティ評定結果 (活動性・4 群別)

孤独 SP を非活動的だと判断していることがわかる。つまり、大学入学直後でも孤独感を感じない一貫して孤独感の弱い人は、慢性的に孤独な人物、つまり自己とは類似していない人物に対して非活動的なイメージを抱きやすいことが明らかにされた。また、孤独感が高まった人 (L-H 群) よりも孤独感が低いまま変わらない人 (L-L 群) の方が慢性的孤独 SP の活動性を低く判断していた (Fig. 3)。

次に、状況的孤独 SP については、活動性次元および個人的親しみやすさ次元において有意差が認められた。まず活動性次元においては、群の主効果が認められ ($F(3, 219) = 2.99, p < .05$)、多重比較の結果、H-H 群と L-L 群の間に有意差が認められた ($p < .05$)。個人的親しみやすさ次元においては、群の主効果が認められた (F

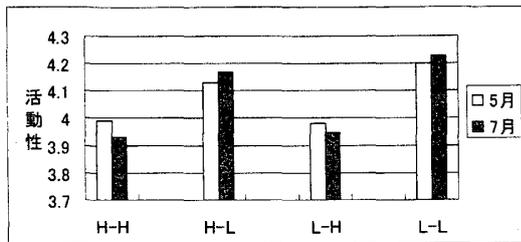


Fig. 4 状況的孤独 SP に対する
パーソナリティ評定結果 (活動性・4 群別)

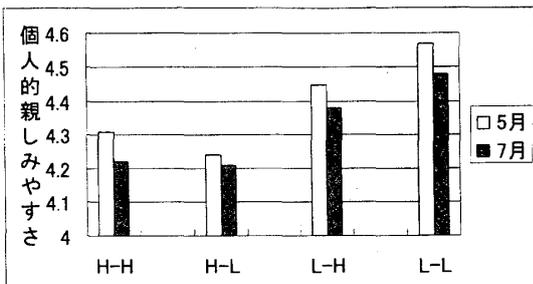


Fig. 5 状況的孤独 SP に対するパーソナリティ
評定結果 (個人的親しみやすさ・4 群別)

(3.223) = 4.88, $p < .01$)。Tukey 法による多重比較の結果、H-H 群と L-L 群の間に差が認められた ($p < .01$)。また、H-L 群と L-L 群間の差も有意傾向にあった ($p < .10$)。したがって、孤独感が一貫して高い人よりも一貫して低い人の方が、状況的孤独 SP に対して活動性と個人的親しみやすさを高く感じている可能性が読みとれた。また、孤独感が低減する人 (H-L 群) と比較しても、一貫して孤独感が低い人の方が個人的親しみやすさを高く評価している傾向が読みとれた (Fig. 4, Fig. 5)。

最後に、孤独でない人物 (非孤独 SP) については、活動性次元において、時期の主効果のみが認められた ($F(1, 220) = 6.84, p < .05$)。これより、全体的に7月の方が活動性を低く評価している可能性が示された。

【考 察】

1. 状況的孤独感と慢性的孤独感について

まず、各孤独感群の孤独感得点と親和動機の関連を検討したところ、群の主効果が有意であり、一貫して低孤独者の親和動機が最も高く、一貫して高孤独者の親和動機が最も低いことがわかった。これは、慢性的 or 状況的という枠組みから議論すれば、慢性的孤独者の親和動機が低いということになる。また状況的孤独者 (H-L 群) においても親和動機が高いことをも同時に示された。つまり、孤独を感じにくい人や状況的に喚起された孤独を低減させている人の親和動機は高いという結果としてまとめることが可能であろう。したがって、慢性的孤独の高さとは直接関連しない対人的な欲求である親和動機が、一時的状況的孤独感の高まりもしくはその低減とは関連している可能性を考えることが可能である。状況的孤独を感じさせる状況要因やその影響の受けやすさといった個人差要因、さらにはその解消への動機づけなどとの関連性について今後検討していくことの重要性が示唆されたとも考えられる。

本研究の第1の目的は、孤独感をその性質により状況的孤独感と慢性的孤独感、およびその他の群の4種類に分類し、それぞれの孤独感が喚起されている被験者の対人認知の特徴を捉えることであった。

孤独 SP に対する認知的複雑性について検討した結果、5月の複雑性が他に比べて低くなってい

ることが明らかとなった。仮説1では、慢性的孤独感群の方が複雑性が高いと予想されていたが、検定の結果はこれを支持していない。ただし、その得点から判断すれば、L-L群が他の群よりも認知的複雑性は高い値を示しているとも読みとれる。また、5月と7月で孤独感得点に変化のあった群の方が一貫している群よりも、認知的複雑性の得点にもより大きな変化が読みとれることも興味深い。ただし、状況的に変化する孤独感と認知的複雑性が比例関係にあるという単純な結果ではない。

状況によって喚起された孤独感が、他者を認知する個人特性（認知的複雑性）にまで影響を及ぼすものなのか、といった問題を解明していく研究が必要となる。ただし、本研究のデータは、認知の対象として用いた刺激人物が、孤独の高低のバリエーションしか想定していない。このことは、個人がその時点でもつ認知様式を測定するという視点からは、極めて不十分であることは否めない。日常的に遭遇する人物に対する認知に基づく認知的複雑性の得点に対する分析が、今後当然必要となってくるだろう。

慢性的な孤独者に対する認知では、L-L群が他の群に比較して、慢性的孤独SPを非活動的だと判断していることがわかった。つまり、大学入学直後でも孤独感を感じない一貫して孤独感の弱い人は、慢性的に孤独な人物、つまり自己とは類似していない人物に対して非活動的なイメージを抱きやすいことが明らかにされた。このことは、大学入学直後でも孤独感を感じない一貫して孤独感の弱い人は、慢性的に孤独な人物、つまり自己とは類似していない人物に対して非活動的なイメージを抱きやすいことを意味し、またこういった結果は、慢性的に孤独の高い人物に対しては、類似-魅力仮説が予測できるような非類似の他者に対するネガティブに認知をするという関係を想定することができる可能性が示唆されたと言えよう。

これに対して、状況的孤独者に対する認知では、群間の差が大きい。大きな特徴としては、一貫して孤独な人（H-H群）は、状況的孤独者に対してネガティブに認知する傾向があることである。また、これとは逆に、一貫して孤独でない人（L-L群）は、状況的孤独者に対して比較的好意的な認知をしていることも特徴的である。これを類似-魅力の観点から考察することは不可能である。

Byrne & Nelson (1965) は態度が類似した他者

の魅力が増大することを示しているが、これが孤独な他者に対しても起こる可能性は大いに考えられよう。そもそもパーソナリティの類似と態度の類似とは、それが魅力に影響するメカニズムが異なると考えられるが、状況的な孤独者が状況的な孤独者に対してポジティブな評価をするという程度が、慢性的な孤独者が慢性的な孤独者に対する評価がポジティブになる程度よりも小さいとすれば、孤独といういわばネガティブな状態での類似性もっていることの効果という文脈から考えても、興味深い事実である。いずれにせよ、仮説2は部分的に支持されたと考えてよいだろう。また、本研究の結果は、Jones, Freeman, & Goswick (1981) といった研究の中で指摘されてきた、「高孤独者は他者に対してネガティブな評価を行った、ネガティブな印象を抱く傾向がある」ということに対して、新たな視点を示唆するものとなる可能性があるだろう。

【今後の課題】

本研究は、孤独感の性質に注目して、さまざまな角度から対人認知との関連について検討しようというものであった。しかしながら、本研究で設定した群分けの有効性には問題点が多く含まれている。まず、状況的孤独感群についてであるが、彼らの中には、5月・7月の領事点とも孤独感得点が低く、「孤独感が喚起されていた」と呼ぶにはふさわしくないものも含まれていた。こういった「孤独でない者」の影響が少なからずあったことも考えられる。また、本研究では、7月の方が大学への適応度が高く、孤独感も通常の状態になっていると仮定して状況的孤独感の操作的定義や高さに変化という視点からの検討を行ってきたが、実際に5月の状況が孤独感を喚起していたかどうかは定かではない。そのため、今後は孤独感の定義も考慮しながら、どのような状況が孤独感を喚起させるのか、あるいはどのような状況が孤独感に変化をもたらす一因となるのかという、直接的な状況の考察も重要になってくると考えられる。

【引用文献】

- 相川充 1996 孤独感と社会的スキル 相川充
 (編) 社会的スキルと対人関係 誠信書房
 Bieri, J., Atkins, A. L., Briar, S., Leaman, R. L.,

- Miller, H. & Tripodi, T. 1966 *Clinical and social judgement: the discrimination of behavioral information*. New York: Wiley
- Borys, S., & Perlman, D. 1985 Gender differences in loneliness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 63-74.
- Byrne, D. & Nelson, D. 1965 Attraction as a Linear Function of Proportion of Positive Reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Cutrona, C. E. 1982 Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In Peplau, L. A. & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Willey & Sons, Pp. 291-309
- 林文俊 1976 対人認知構造における個人差の測定(1) - 認知的複雑性の測度についての予備的検討 - 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 23, 27-38
- 林文俊 1978 対人認知構造の基本的次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233-247
- 廣岡秀一 1990 パーソナリティ認知に及ぼす対人場面の効果 - 対人コミュニケーション場面における検討 - 愛知淑徳短期大学研究紀要, 29, 75-90
- 廣岡秀一 1996 対人認知における状況的要因 長田雅喜(編) 対人関係の社会心理学 福村出版
- 廣岡秀一・星野芳之 2000 対人関係期待の状況的変動性に関する研究 三重大学教育学部研究紀要, 51, 175-187
- Jones, W. T., Freeman, J. A. & Goswick, R. A. 1981 The Persistence of Loneliness; Self and Other Determinants. *Journal of Personality*, 49, 27-48
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I) - 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 - 実験社会心理学研究, 22, 99-108
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25, 115-125
- 諸井克英 1991 生活事態変化に伴う孤独感 人文論集(静岡大学人文学部社会科学科・人文科学研究報告), 41, 29-63
- 諸井克英 1995 孤独感に関する社会心理学的研究 - 原因帰属および対処方略との関係を中心として - 風間書房
- 岡島京子 1988 親和動機測定尺度の作成 教育心理学会第30回大会発表論文集, 864-865
- Peplau, L. A. & Perlman, D. 1982 Theoretical approaches to loneliness. In Peplau, L. A. & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Willey & Sons, Pp. 123-134
- Russel, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale; Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 524-531